

「虚しい生き方から贖われた者 身代わりの愛」

第一ペテロ 1:18-21

クロクロス（自転車競技）世界選手権でのこと。1位の選手がゴールし、ガッツポーズでウィングラン。大歓声の中、2位の選手が追い抜きました。実はこのレースはまだ終わっておらず、ウィングランを走っていた1位の選手は、あと一周残していたのです。勘違いで優勝を逃した選手。私達の生き方もこのような時があります。いろんな苦しいことがあってやっとたどり着いた救い、ゴールのように思いました。

■ 贖い

贖うとはヘブル語でパーダー「救い出す」という意味。この言葉が最初に出て来たのは、出エジプト記の「過ぎ越し」の時です。奴隷だったイスラエルの民がエジプトを出る時、神様はエジプトの地を打ち、すべての初子が死にました。2本の門柱とかもいに傷のない羊の血を塗ったイスラエルの人の家だけは、その犠牲によって滅びから命が救われたのです。キリストの十字架の何千年も前に予見されていた言葉（出エジプト 13:1-3・13）を使って、犠牲の羊（十字架によって流されたキリスト）の血によってあなたは贖い出されたのだとペテロはここで伝えています。

「ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」（1ペテロ 1:18,19）

「父祖伝来のむなしい生き方」とは、本質を欠いた生き方。「贖い」とは大きな代償を払って引き取るということ。イエス様は命の犠牲により、本質を欠いて過ちばかりおかししてしまう私達の人生を買い取ってくださいました。私たちはこの大きな犠牲と愛により、贖われ今、新しく歩むことができているのです。

■ 神の御心に

「それから、ペテロとゼベダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。

「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」（マタイ 26:37～39）イエス様が十字架の道に進まれる前に祈られた祈りです。イエス様が十字架にかけられるまでの不当な苦しみの中、神の御心に従われました。

その場面において、多くの人が様々な行動を取りました。『十字架にかけられていた犯罪人のひとりにはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」（ルカ 23:39-42）

イエス様のラストランのストーリーの中で、私自身ほどの行動を取る人でしょうか。

■ 喉元過ぎて

裕福な男性と結婚、豊かな生活を送るインドの女性の物語が紹介されました。彼女の大事にしているのはモノやお金、地位。ある日、インドに帰り、古い友人に出会うと、友人は貧しいまま。しかし「もしあなたが神様を知っていて、生き方を悔いることができたらいいのに」と言われました。インドから帰る途中、電車が故障で止まりました。彼女は1週間電車が動かない中で考えました。「このままでいいのだろうか。やり直そう」と決めました。ところが、電車が動き出した途端、忘れてしまいます。（アガサ・クリスティ『春にして君を離れ』より）当たり前前に生活する中で、苦しかった中から贖われたことを忘れてはいないでしょうか。

■ 犠牲を忘れてはならない

イエス様はゲッセマネの祈りの中で、神の御心に従い、どんな苦しみをも受ける決意をされました。十字架刑の苦しみの中、嘲笑う祭司長や着物をくじ引きにしていたローマ兵、意味もわからず傍観する群衆を見て、

『そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」』（ルカ 23:34）と祈ることができたのです。

「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい。」（マタイ 16:24）もし、苦しみがあるなら、神様が与えようと用意されている将来の希望までに通る私達のための試練。犠牲を忘れることなく、イエス様がされたように祈ることができれば、私達の試練は必ず忍耐することができるはずです。

■ 復活に生きる

贖われた命を最後まで本気で生きているのでしょうか。ホスピスの医師は最期の2週間がその人の人生の全てを物語ると話されたそうです。もし、2週間後に人生が終わるとしたら…。いつ終わるかは誰にもわからない。命の時間はすべての人が平等にわからない。死が突然やってきて、継承する準備ができているのでしょうか。

■ さいごに

過ちを繰り返す古い自分の価値観は今も生きていて、贖われた命の恵みをむだにしてしまうような行動を取ってしまいます。どれほど神様が私達を愛しているかを忘れないようにしなければなりません。

「私たちも、いっさいの重荷とまとわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を、忍耐を持って走り続けようではありませんか。」（ヘブル 12:1）ラストランをともに真剣に走りましょう。

（要約者：藤原 友規子）

（2021年3月28日）